

平成21年度 自閉症に対応した教育課程の在り方に関する調査研究 事業 中間報告書

1 研究のねらい

本県においては、知的障害を主とした教育の対象とする特別支援学校で自閉症を併せ有する児童生徒が年々増加している。また小・中学校においても、自閉症を中心とした情緒障害特別支援学級の設置数が年々増加するなど同様の傾向が見られる。このような状況から、各学校においては、教育課程の編成と指導内容・方法の工夫に手掛かりを得て、自閉症の特性に応じた指導を展開していくことが緊急課題として挙げられる。

県内の研究機関における自閉症に関する研究については、平成16年度から19年度までの4年間、宮城県特別支援教育センターが小・中学校や特別支援学校を研究協力校として「自閉症の児童生徒へのアセスメントに関する実践的研究」に継続的に取り組み、「小・中学校教師のための自閉症指導の手がかり（目標達成）のためのアセスメント手引き」や研究紀要を発行し、その成果を県内の小・中学校、高等学校等に示してきたところである。一方、学校教育現場においては宮城県南部の特別支援学校における公開研究会を中心として、自閉症の障害特性に配慮した視覚的情報の活用や学習環境の構造化等、学習環境や支援の工夫について一定の成果を上げてきたところである。

平成21年度は、これまでの自閉症の障害特性に配慮した学習環境や支援の工夫に関する研究成果を踏まえ、本調査研究事業の委託を受けながら、本県北部の同一圏域における小・中学校、特別支援学校の連携の下、アセスメント（実態把握・指導目標設定・授業実践・評価・改善）を中心として、自閉症の特性に応じた教育課程の編成と指導内容・方法の工夫に関する研究を行い、その成果を本県全域の各学校に広め、自閉症の特性に対応した指導の改善に努めていきたいと考える。

2 研究内容

1. 東松島市立赤井南小学校

1) 現状の分析と研究の目的

本校には、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している自閉症の児童が2名いる。また、通常の学級にも対人関係の形成の困難さやコミュニケーション能力の遅れが見られる児童など、高機能自閉症の疑いのある児童が数名いる。校内支援委員会等が中心となって自閉症の障害特性から派生する特別な教育的ニーズに対応した指導の在り方を探っているところである。

今後は、本研究をとおして、自閉症児童のアセスメント（実態把握・目標設定・評価・改善）の在り方を中心として、一人一人の教育的ニーズに対応した教育課程及び指導法の在り方を探りたいと考える。

2) 研究仮説

自閉症児童の一人一人の教育的ニーズ（本人・保護者・教師）を基に、実態把握・指導目標設定・授業実践・評価・改善という適切なアセスメントを行えば、自閉症の特性に応じた教育課程及び指導法の手掛かりを得ることができるであろう。

2. 東松島市立鳴瀬第二中学校

1) 現状の分析と研究の目的

本校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している生徒は、知的障害を伴う自閉症の生徒である。顕著な言語の遅れに伴い周囲の状況把握が不十分で、状況に応じたコミュニケーションをとれないことが大きな課題となっている。この点を踏まえた具体的な対応策が学校として十分確立されておらず、特別支援学級担任をはじめとした教職員全体の共通理解と協働体制の下、組織的な取組が必須であると考ええる。

そこで自閉症生徒のコミュニケーション能力や対人関係の改善を目指し、その特性に応じた指導内容・方法及び教育課程の在り方を明らかにすることを本研究の目的とする。

2) 研究仮説

自閉症生徒の実態を的確に把握し、指導目標の設定、障害特性に応じた効果的な指導内容・方法の工夫、的確な評価等、一連のアセスメントについて教職員全体で組織的に取り組めば、対象生徒のコミュニケーション能力の育成や対人関係の改善を図ることができるであろう。

3. 宮城県立石巻支援学校

1) 現状の分析と研究の目的

宮城県立石巻支援学校は毎年児童生徒の人数が増加してきており、本県北部地区における特別支援教育に関するセンター的機能を期待されている。児童生徒の実態は、年々障害の重度・重複化が進んできており、そのうち自閉症を併せ有する児童生徒数の在籍率は小学部 32.3%、中学部 33.3%、高等部 30.8%になっており、近年増加の傾向にある。このような現状を踏まえ、自閉症の児童生徒に対して個別に教材・教具や指導内容・方法等の様々な工夫を行い、学習環境の整備にも努めてきているが十分な成果を上げているとは言い難い面もあり、自立活動等自閉症の特性に応じた教育課程の編成が求められている。

今後、学習指導要領の改訂に合わせ自閉症の児童生徒の教育内容の充実を図っていくためには、専門家チームの指導助言を仰ぎながら、特別支援学校の教員としての専門性を高め、自閉症の特性に応じた教育課程の編成を行うことが緊急の課題となっている。

また、地域における特別支援教育に関するセンター的機能を果たすためには、小・中学校と連携を図りながら、地域の特別な支援を必要としている児童生徒のために、一人一人の実態に応じた指導内容・方法の確立や教育課程の編成を支援していくことも求められている。

2) 研究仮説

地域の小・中学校と特別支援学校間において、以下のような取組を行っていけば、自閉症の児童生徒に対する理解が深まり、自閉症の特性に応じた指導内容・方法等の工夫が促進し、地域全体としてより良い教育課程を編成することができるようになるであろう。

- A) 小・中学校の特別支援教育コーディネーターと特別支援学校担当者及び専門家チームの教育課程ワーキング会議を設け、お互い情報交換を行い、専門家チームからの助言を受けながら自閉症に応じた教育課程の編成に取り組む。
- B) 写真や絵、情報機器等を活用した活動の視覚化や、絵カード・文字カード等の視覚的なコミュニケーション手段を利用した指導の工夫を行う。
- C) 自閉症の特性に配慮し、施設・設備等の学習環境を整備する。
- D) 支援学校を会場に、研究実践校共同研修会や公開授業研究会を実施し研究成果の発表により、地域全体における自閉症への理解を深める。また、専門家等広範に意見を聞きながら、自閉症の児童生徒の特性を生かした指導内容・方法を工夫し、より良い教育課程の編成を図る。

3 評価の方法

- 1. 対人関係の評価（ソーシャルスキルによる評価）
- 2. 行動面の評価（応用行動分析による評価）
- 3. 授業分析による評価（コミュニケーションのチェック等）
- 4. TEACCHプログラムによる評価
- 5. 子どもの家庭における行動変容を把握するため、研究1年目と2年目の終わりに、保護者向けのアンケート調査
- 6. 学校における教師の自閉症に対する理解度の変容を把握するための、教師を対象としたアンケート調査
- 7. 発達の変容を把握するため、日常生活等における行動観察チェック表、PEP-3（自閉症・発達障害児教育診断検査）、KIDS（乳幼児発達スケール）、S-M社会生活能力検査を指導前及び指導後に実施し比較検討を行う。

4 研究の経過

1. 東松島市立赤井南小学校

1) 研究の経過

ア 教育課程の編成に向けて

A) 現在の教育課程の指導内容を自立活動の項目ごとに整理した結果、以下のような傾向が分かった。

a) 「人間関係の形成」の項目 (2) 他者の意図や感情の理解に関することの指導内容が、学級集団で行う自立活動の時間や、交流学习の生活や音楽等の教科学習で多い。このことから、他者との対人関係を構築していくことに困難さがある自閉症児の特性にそった指導の場を、多く設けているという傾向がとらえられた。

b) 「コミュニケーション」の項目 (2) 言語の受容と表出に関すること (5) 状況に応じたコミュニケーションに関することの指導内容が、個別や学級集団で行う自立活動の時間に多い。意思伝達の質的な障害という自閉症の特性から、個別の活動で実態に応じたコミュニケーションの指導を行い、その般化の場として友達、家族、地域の方々等とコミュニケーションを取る活動の場を、数多く設定しているという傾向がとらえられた。



～「ほしがきうきうきショップ」を開いて地域の方と交流～



～豆まきに各学級を訪問して友達と交流～

イ 障害特性に応じた効果的な指導内容・方法の工夫

A) 在籍児童A児とB児のアセスメント（実態把握、目標設定、授業実践、評価・改善）を通して、自閉症児童の特性に対応した指導内容や指導方法及び支援の工夫を行い、授業改善を図った。

a) A児の実態把握

<主障害> 自閉症（知的障害）

<行動観察>

（言語理解）平仮名、片仮名の読み書きの大体ができ、短文を読んで、内容を理解することができる。

（表出言語）物の名前の理解と発語が150語ほどある。反響言語があり、会話は成立しないことがある。

（集団参加）集団に入ることを好まない傾向が見られ、大人と一緒に参加することができる。小集団には自力で参加し、落ち着いた態度をとる。

(相互交渉) 簡単な指示を理解し、行動に移すことができる。要求は単語や身振り、クレーン行動で行う。大人とのかかわりを要求することはあるが、友達へ働きかける姿はあまり見られない。

(不適応行動) 好きなことを中断されたり嫌なことを強要されたりすると、あごを机に打ち付ける自傷行為がある。苦手な音に耳にふさぐ。

<保護者の願い>

- ・話せる言葉を増やして、会話ができるようになってほしい。

<諸検査の記録>

- ・ P E P - R (H21.7.29)
 発達年齢 () 模倣 () 知覚 () 微細運動 () 粗大運動 ()
 目と手の協応 () 言語理解 () 言語表出 ()
- ・ S - M社会生活能力検査(H21.10.5)
 S Q () S A () 身辺自立 () 移動 () 作業 ()
 意志交換 () 集団参加 () 自己統制 ()
- ・ 太田の Stage (H21.10.30) Stage ()

< A 児の目標設定 >

長期目標 (1年間)	短期目標 (2学期)
<ul style="list-style-type: none"> ・理解や表出できる言葉を増やして、2語文を表現する。 ・簡単な質問に応答する。 (自立活動「コミュニケーション」 (2) 言語の受容と表出に関する こと) 	<ul style="list-style-type: none"> ・動きのある言葉を30語理解、発話する。 ・「～を～する」の2語文を話す。 ・「これは何ですか」「これはだれですか」「これは～ですか」の質問に 応答する。

b) B児の実態把握

<主障害> 多動性アスペルガー症候群

<行動観察>

(言語理解) 語いが豊富で難しい言葉を使うが、意味を理解していないことがある。文章を読み取る力に優れている。

(表出言語) 自由に会話をする。気持ちと逆の否定的な言い方をするときがある。困ったことや分からないことを言葉で表現できず、情緒が不安定になるときがある。

(集団参加) 大勢の人や初めての人が苦手で、情緒が不安定になる。小集団では落ち着いた行動をとることができる。

(相互交渉) 特定の人と一緒にいて話すことを好むが、適切なかかわりをもつことは難しい。あやまちを認めることを嫌がり「ごめんなさい」と言うことに抵抗を示す。

(不適応行動) ルールを守ることを嫌がり、廊下の疾走等がある。勝敗にこだわり、

負けることを嫌がって不適切な行動をとることがある。

<保護者の願い>

- ・困ったときや分からないときに言葉で表現できるようになってほしい。間違っ
たときに「ごめんなさい」が言えるようになってほしい。

<諸検査の記録>

- ・ WISC-III (H21. 7. 28) FIQ : () VIQ : () PIQ : ()
- ・ K-ABC (H21. 7. 22) 継次処理能力 : () 同時処理能力 : ()
認知処理尺度 : () 習得度 : ()
- ・ S-M社会生活能力検査 (H21、10、5) SQ () SA ()
身辺自立 () 移動 () 作業 () 意志交換 ()
集団参加 () 自己統制 ()

< B児の目標設定 >

長期目標 (1年間)	短期目標 (2学期)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 肯定的な言葉を増やし、使えるようになる。 ・ 状況や場面に応じた言葉を理解し、使えるようになる。 (自立活動「コミュニケーション(5) 状況に応じたコミュニケーションに関する事」) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相手の意図を受け止めて、思いを伝えたり行動に移したりすることができる。 ・ 励ます言葉やあいさつ言葉、あやまり言葉を理解し、使えるようになる。 ・ 「分かりません」「困っています」を文字カードや話し言葉で表現することができる。

c) A児とB児に対する指導の手立て

- ・ 指導場面は自立活動の指導時間を中心とし、国語や算数、体育や音楽、図工などの交流及び共同学習の場面等で関連させて指導していく。
- ・ 目標達成までの段階を細かく設定し、スモールステップで指導にあたる。また、課題の達成度が児童に分かるような評価の仕方を行っていく。
- ・ 絵カードや写真カード、文字カード等の視覚的な教材を用いたり、動作に言葉を添えたりして言語の受容と表出の向上を図る。(A児)
- ・ 絵カードや文字カードで場面設定を行い、状況に応じた言葉の表現ができるようにする。また、言葉での表現ができればポイントが付くというゲームを行い、ゲームを通して援助を求める言葉が表現できるようになることをねらっていく。(B児)
- ・ コミュニケーションの基礎となる聴覚、視覚の向上を図る。
- ・ スケジュールを構造化し、見通しをもって活動できるようにする。
- ・ 個別の課題学習場面で場の構造化を図り、落ち着いて学習に臨めるようにする。

d) 授業実践

<第1回 自立活動「はっきりはなそう」(6/15時)の授業研究>

- ・ 在籍児童2名とも、注意を向けるものに視線が合わない実態があるので、「見てて

ゴ-」というゲームを行い、瞬間的に絵カードや数字カードを見せて、分かったら答える活動を行った。A児は得意な数字カードで速く正しく答えることができた。また、答える際にお話棒という教具を使って、担任に答えを知らせることにした。常に大きな声で話す傾向のあるB児には、お話棒を使うときは声の大きさ1で話すことを指導した。その結果、B児は小声で話すことを意識するようになった。



～声の大きさの掲示物～

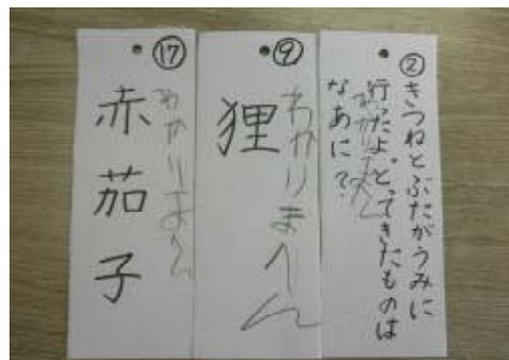


～お話棒を使って声の大きさ1で話すB児～

- ・A児には、動作を見て動きのある言葉を話したり、動きのある言葉を聞いて動作化したりさせ、動きのある言葉の理解と発語を促した。その結果、15語ほどの動きのある言葉の理解と発語ができた。(A児)
- ・A児に対し、物と動きのある絵カード2枚を見せて、「～を食べる」「～を飲む」の2語文を話したり書いたりする学習を行った。2枚の絵カードと助詞「を」の文字カードを見て、10文の2語文を話したり書いたりすることができた。
- ・B児には、読みが分からない漢字やクイズを文字カードで示し、言葉で「分かりません。教えてください」が言えたらポイントが付くというゲームを行った。その結果、「分かりません」が言えるようになり、ゲームでのポイントが8個になった。これまで、援助を求める言葉を使うことに抵抗を示していたB児であるが、ゲームを通して援助を求める言葉が表現できるようになった。(B児)



～二枚の絵カードで2語文を指導～



～クイズや漢字の読みで援助を求める状況を提示～

- ・スケジュールを構造化し、見通しをもって活動できるようにするとともに、取り組む学習に矢印を付けることにより、視覚的に分かりやすくした。また、学習の達成度を

表情マークで評価し、成就感をもたせるようにした。



～在籍児童それぞれのスケジュールを示し、活動に見通しをもたせるとともに、それぞれの活動を評価した～

- ・A児は絵カードを見て2語文を書くという個別の課題学習に取り組んだ。その間、指導者はB児の個別指導を行っていたため、A児の課題終了時に指導者の対応が遅れた。その結果、A児のあご打ちの自傷行為が見られた。このことから、個別の課題学習の在り方が今後の課題となった。

<第2回 自立活動「はっきりはなそう」(10/15時)の授業研究>

- ・指示を聞いて行動に移すことができるよう「タッチでゴー」というゲームを行い、コミュニケーションの基礎となる聴力や短期記憶の向上を図る活動を行った。初めは、言葉の指示だけでは困難であり、指示する物の絵カードを添えていたが、徐々に言葉だけの指示で行動に移せるようになった。また、色と数字、色と形などの掲示物を作り、2つの情報を同時に処理することができるような指導を行った。



～色と数字の掲示物～



～色と具体物の掲示物～

- ・A児には絵カードを示し、「これは～ですか」の質問に答える学習を行った。反響言語が少なくなり、「ちがいます。～です」と正しく答えることができるようになった。(A児)
- ・B児には、前時まで行っている難しい読みの漢字や計算等の提示に加えて、困るような状況の絵図を提示した。言葉で「困っています。手伝ってください」の援助を求める言葉が言えるようになることをねらった。しかし、「困っています」の表現に対する抵抗が指導者の予想以上に大きく、言える状況ではなかった。そこで、前時まで行っていた「分かりません。教えてください」の定着を図ることに主眼をおいて活動を進めた。本人による言葉の表現の前に、ぬいぐるみを介して表現させるなどの工夫を

していれば、異なる反応が出ていたのではないかと 反省した。(B児)



～「ちがいます。〇〇です」の答え方を指導～



～絵カードによる困っている場面の提示～

- ・在籍児童が2名のため、指導者と個別に学習する場面と自力で課題に向かう学習場面で、移動式のつい立てを使った。つい立てを使うことにより、友達の様子を気にすることなく集中して課題に取り組む様子が見られるようになった。また、前回の授業研究で課題となった、個別の課題学習の在り方について改善を図った。課題が終了して報告ではなく、課題を豊富に用意して学習させ、終了はタイムタイマーを使って、ベルが鳴ったら指導者に報告をするようにした。児童は、「何を、どこまでするか」が分かり、落ち着いて自ら学習に取り組むようになった。また、指導者は他児童との個別の学習を計画的に進められるようになった。



～つい立てを使っている個別学習場面～



～タイマー終了まで自力で課題学習～

ウ 研修会、授業研究会の実施

- A) 自閉症の特性に対応した支援の在り方を全職員で共有化し、通常の学級に在籍する発達障害の児童の支援にも生かすように努めた。
 - a) 自閉症・情緒障害学級の授業を全職員で参観する全校授業研究会の実施
<教科・単元名 算数科「丸、三角形、四角形」 本時(2/5)>
<本時のねらい> 三角形の基本的な性質が分かり、ひご等で三角形を表したり、分類したりすることができる。

(自立活動の視点では「コミュニケーション」— (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること、「環境の把握」— (1) 保有する感覚の活用に関すること (5) 概念や行動の手掛かりとなる概念形成に関することととらえた。)

<指導の手立てと児童の様子>

- ・在籍児童2名とも三角形の性質を正しく理解しておらず、曲線の辺があったり頂点が切れている形も三角形ととらえていた。そこで、「タッチでゴー」の図形版を作成し、ゲームを通して三角形の性質についての問題提示を行った。指導者の予想通り、「三角形にタッチでゴー！」の指示で、児童は不定形の三角形にもタッチをした。そこで、その形の辺や角に直線やシールをはる活動を行い、三角形の性質に気付かせていった。体験的な活動を通しながらB児は自ら間違いに気付き、「脱落」という言葉で角の切れた形は三角形でないことを表現していた。
- ・ひごと粘土玉で三角形を作ったり、三角形を分類したり、ブラックボックスから三角形を探し出したりする活動を行い、学習意欲を持続させながら三角形の性質に気付かせていった。また、分類した三角形をお互いに確かめ合う場を設定したところ、間違いのあったA児に対して、辺や角の数を数えて教えようとするB児の姿が見られた。



～「三角形にタッチでゴー」間違いからの問題提示～ ～触覚を働かせて三角形を弁別～

< 参観者から寄せられたフリーカードのコメント >

- ・授業の見通しを子どもに示し、ねらい達成に向けての教材・教具の工夫や発問の工夫などが見られた。
- ・B児の言語能力（表現力）を活用して説明させたりA児の数に対する興味を生かして数えさせたり、個の実態に応じた学び合いがなされていた。
- ・直線やシールをはる活動により、本時のねらいに直結する気付きが生まれた。算数的活動がねらいに即して工夫されていた。そのベースにあるものは、確かな児童理解と学級経営であると感じた。児童と教材と教師が調和して、学びが豊かになっていくことを感じた。

b) 臨床心理士の先生を講師として招へいし、「気になる子の指導の在り方」というテーマで、発達障害の理解と対応を学ぶ講演会を行った。

< 講話の主な内容 >

- ・子どもをいろいろな観点で見ることが重要である。気になる子どもは総合的に見ないと分からない。情報を大事にして指導や支援に当たることが大切である。
- ・何ができて何ができないか？（査定）どんな支援をすればできるようになるか？（工夫）どこまでできるようになるか？（見通し）「これだけ

は教えなければ」という事柄（思い）で支援し、義務教育終了後に社会生活を送れるような人間になるようにしていきたい。

- ・親を支援し育てることが、子どもの継続的な支援を可能にする。親が社会的資源を適切に使えるようにサポートしてほしい。時として、人を信じない雰囲気は親が子に伝えてしまうこともある。

<参加者から寄せられた感想>

- ・具体的な事例をもとに、児童への支援策や考え方、保護者との関わり方などを教えていただいた。児童の実態を正しく、そして深く見取ることの大切さを改めて考えさせられた。
- ・事例を聞きながら、学年のたくさんの子供たちに当てはまると感じた。特に忘れ物について固定化された何人かの子どもの指導に苦勞しているが、なぜ指導が及ばないのかその原因が明確になった。早急に変わることはないと思いつつ、それでも粘り強く「少しの進歩」を目指していこうと思った。
- ・家庭と学校、親と教師の関係の大切さを感じた。教師は子どもと親を見て指導する必要性があると感じた。たいへんすばらしい講話だった。

2) 成果と課題

ア 成果

- A) 現在の教育課程の指導内容を自立活動の項目ごとに整理した結果、自閉症児の特性に対応した活動を多く設定していることが分かった。具体的な指導の場としては、個別に行う自立活動の時間や実際的な状況下で活動する学級集団で行う自立活動の時間があった。それぞれの活動を関連させていくことにより、より効果的な指導ができると考えられる。
- B) 授業研究会において、指導主事から自力で課題へ取り組ませる際の指導助言をいただき、授業改善を図った。その結果、児童は「何を、どこで、どこまでするか」が分かって落ち着いて活動に取り組むようになった。また、目標を明確にするとともに、視覚支援やスケジュール、場の構造化を図った結果、在籍児童の短期目標をほぼ達成することができた。

イ 課題

- A) 系統性や関連性を考慮した教育課程作りとそれらを指導する場を設定していく必要がある。
- B) アセスメント（実態把握）と目標の関連を明確にして指導にあたり、児童の変容を検査等で客観的にとらえていく必要がある。

3) 今後の展望

今後は、アセスメント（実態把握）を多面的な方法で行い、それに基づいた自立活動の個別の指導計画を作成して、指導目標及び指導内容、指導方法と指導の場を明らかにしていく。そして、自閉症の特性に対応する指導の内容や支援の工夫を行

い、専門家の助言を仰ぎながら改善を図って深め、事例を中心にまとめていきたいと考えている。

2. 東松島市立鳴瀬第二中学校

1) 研究経過

ア 教育課程の編成に向けて

A) 現在の教育課程の指導内容を自立活動の項目ごとに整理した結果、以下のような傾向が分かった。

- a) 「人間関係の形成」の項目（2）他者の意図や感情の理解に関すること
（4）集団への参加の基礎に関することの指導内容を学級集団で行う自立活動の時間や、交流学习を行っている教科の学習で多く行っている。このことから、相手の様子に応じて行動することや、他者との関わり方が十分に身に付いていない自閉症生徒の特性に応じた指導の場を多く設けている傾向がある。
- b) 「コミュニケーション」の項目（2）言語の受容と表出に関すること
（4）コミュニケーションの手段の選択と活用に関することの指導内容が国語を中心とした教科の学習に多い。このことから、話し言葉や文字等を用いて、相手の意図を受け止めたり、自分の考えを伝えたりすることを苦手とする自閉症生徒の困難を克服するための指導の場を多く設けている傾向がある。



～「卒業進級を祝う会をしよう」で

～「買い物しよう」でお店の人と交流～

他校の友達と交流～

イ 障害の特性に応じた効果的な指導内容・方法の工夫

A) アセスメントから対象生徒の実態を把握することができ、指導目標の設定や指導内容・方法の課題が明らかになった。

a) A男の実態把握

〈主障害〉広汎性発達障害

〈検査考察〉視覚優位で、知覚統合が優れているが、言語理解、注意記憶

が平均以下である。

〈行動観察〉

(言語理解) 聞き間違いや聞き漏らしがあること、新しい言葉をなかなか覚えられないこと、言語による指示理解が難しく、ちょっとした雑音にも注意が散漫になること等があげられる。

(認知処理) 習った漢字を読めなかったり、形態的に似た漢字の読み間違いをしやすいこともあげられる。学習内容を理解していなかったり、文章の要点を正しく読み取ることが難しい。

〈保護者の願い〉 学習面での知識を向上させてほしい。自立した生活が送れるようになってほしい。

〈諸検査の記録〉

・ WISC-III IQ 99 (VIQ 81、PIQ 120)

・ K-ABC

認知処理過程 98 継時処理 123 習得度 114 同時処理 72

認知処理課程評価点 手の動作 13 数唱 6 語の配列 10

絵の統合 13 模様の構成 15 視覚類推 11

位置さがし 15

習得度標準点 算数 69 なぞなぞ 95 ことばの読み 61

文の理解 74

このことから、視覚的な手掛かりや具体物を提示しながらの学習が有効であると考えられる。また、認知面の課題があるので、認知面を伸ばす指導も必要である。

・ ソーシャルスキルによる評価

(引用文献、「ソーシャルスキルマニュアル」上野一彦、岡田智編著)

実施日	平成21年4月27日	平成21年10月30日
検査結果	集団行動評価点 7 仲間関係評価点 1 コミュニケーション評価点 7	集団行動評価点 10 仲間関係評価点 1 コミュニケーション評価点 9
考察	集団行動及びコミュニケーションスキルについては、スキルの向上が評価点に反映された。特にセルフコントロールでは、授業や課題に集中して取り組むこと、感情的になっても気持ちをうまく切り替えることができるようになったこと、また課題遂行では、失敗や予定外のことが起こっても柔軟に対応することができるようになるなど、環境への適応と情緒の安定が見られるようになった。仲間関係評価は変容がなかったが、他者との関わりに強い関心をもっているため、共通の趣味をもつ仲間が作れるよう配慮したり、交流学級での活動や学校行事等を活用し、同年齢との関係	

向上に努めていく必要がある。

〈A男の目標設定〉

長期目標（1年間）	短期目標（2学期）
<ul style="list-style-type: none">相手の気持ちや周囲の状況に応じた言葉や態度を身につける。 （自立活動「コミュニケーション（5）状況に応じたコミュニケーションに関すること）自分の生活に関わる漢字の読み書きができる。 （自立活動「コミュニケーション」（3）言語の形成と活用に関すること）	<ul style="list-style-type: none">級友の言葉や活動に関心をよせ、級友の良い面に気づくことができる。与えられた手掛かり（写真やカード等）を活用し、できるだけ自分の力で活動を進めることができる。自分のプロフィールに関わる漢字を正しく書くことができる。

B) 自閉症生徒の特性に対応した指導内容及び支援の工夫を行い、授業改善を図った。

a) 第1回目 家庭科の授業研究

諸検査の結果から、視覚的な情報や具体的な場面状況での理解が得意であるという実態を受けて、「目で見て分かるように」を支援の基盤とし、次の点に留意して調理実習の授業実践を行った。

- ・完成までの手順にしたがって、見通しをもって取り組めるように、レシピカードで視覚支援をした。
- ・学級の仲間とお互いに認め合う場面を多く設けるようにした。
- ・めあてカードを掲示し、課題や目標に意識して取り組ませた。

〈授業を振り返って〉

・継続的な調理活動を行ってきたことにより、授業研究会においても円滑に活動する様子がみられた。対象生徒は、自分で作ったレシピカードをもとにどんどん作業を進めることができた。しかし、一緒に活動するクラスメートに対しての関心を高めることができなかった。お互いに向かい合って調理させたり、調理器具の貸し借りなどのやりとりを意識的に学習過程の中に取り入れていくべきであった。また、出来上がったお菓子のお互いの出来映えの感想を発表させる際、「なんていったらいいかわからない」という呟きがみられた。今後は、感想の言葉の例（すごくおいしい、おいしい、あまい、等）を提示し、それを選択させて、自分の思いや考えが述べられるように支援していきたい。



～自分で作った「レシピカード」や「写真カード」をもとに調理～

b) 第2回目 国語科の授業研究

年賀状作りを題材に、これまで継続的に行ってきた国語科の学習の般化をねらいに、次の点に留意して授業実践を行った。

- ・継続的な学習を年賀状作りに発展的に活用した。
- ・学習活動を視覚的にわかりやすく提示した。
- ・他の生徒との関わりを重視し、場の設定を行った。
- ・書きやすいように、わかりやすいように認知面の配慮をした。

〈授業を振り返って〉

- ・黒板に掲示された拡大年賀状を活用した説明、字の大きさやバランスに配慮した下書き、これまで学習した「私について」の自分のプロフィールの学習により、宛名面の記入については、スムーズに行うことができた。しかし、文面の記入では、生徒に提示した資料が多すぎたことや、本人のこだわりにより、思うような指導の成果が得られなかった。今後は、資料をたくさん提示するのではなく、基本となる事項（年賀の挨拶、日付、イラスト等）をいくつか絞って提示し、本人がその中から選択し、レイアウトを考えてから記入ができるような支援をしていきたい。

わたしについて	
氏名	
生年月日	
血液型	
性別	
住所	
地区名	
電話番号	
学校名	
クラス	
担任の名前	

～継続的に行ってきた「私について」～ ～字の大きさやバランスを意識して記入
 できるよう配慮～

C) 自閉症の特性に配慮し、施設・設備等の学習環境を整備した。

- a) 活動に応じた場所の設定として、移動式の棚を活用し、活動スペースを学習

コーナーと趣味のコーナーに仕切った。

- b) 学習コーナーでは活動に応じて机や椅子、作業台の配置を変えるなどの工夫を行った。
- c) 趣味のコーナーでは、カーペットを敷いて活動場所を明確にした。また本校の自閉症・情緒障害学級の在籍は、男女各1名ということがあり、性別に配慮し、カーテンで仕切った着替えコーナーも設けた。



～移動式の棚で仕切った「趣味のコーナー」と「学習コーナー」～ ～着替えのコーナー～

ウ 研究会、講演会の実施

- A) 臨床心理士を講師とし、事例研究会及び教育講演会を行った。
 - a) 第1回目は、対象生徒の事例をもとにした事例研究会を行った。広汎性発達障害は、「自分が他者からどう見られているのかモニタリングができない」「広汎性発達障害の多くは選択性の過敏がある」「オープンクエスション等意図を理解することが難しい」等の障害の特性とこれらの障害に対し、「ルールを決めての指導」「やらされるではなく、自分でやる方向の指導」「音過敏には耳栓やパーテーションの活用」「ソーシャルスキルトレーニングの必要性」等障害特性に対応した支援の在り方について指導・助言を得た。
 - b) 第2回目として「知的遅れを伴わない自閉症児への支援」という演題で教育講演会を行った。

〈講話の主な内容〉

- ・発達障害に関わる診断は、「治療のための仮説であり、宣告ではない」同じ子どもでもどこから見るかによって診断名が変わることがあり、診断名のみこだわらない方が良い
- ・問題行動が見られた場合、本人にとって腑に落ちないままの指導は意味がない。本人が納得するまで時間をかけて向かい合い、指導をしていくことが大切である。
- ・自閉症やアスペルガー症候群は、コミュニケーションの難しさがあることから、適切な環境に身を置けるよう配慮をする。自閉症の子どもにとって心地よい言葉は、他の子どもにとっても心地よいコミュニケーションの言葉である。具体的な対応は次の通りである。

自閉症の子どもへの対応・・・「よ」「い」「か」「た」「ち」

「よ」・・・予告で見通し

「い」・・・言うより見せて
「か」・・・簡単、明瞭
「た」・・・楽しいこだわり見守って
「ち」・・・小さなルール積み重ね。
アスペルガー障害の子どもへの対応・・・「よ」「い」「こ」「せ」「い」
「よ」・・・予告で安心
「い」・・・言ってみせて
「こ」・・・こだわる趣味は特技に変える
「せ」・・・説教せずにルールの説明
「い」・・・いつも冷静いつもおおらか
研究会、講演会を通して自閉症の特性に対応した支援の在り方について、全職員で共有化することができた。



～教育講演会から～

2) 成果と課題

ア 成果

- A) 教育課程の指導内容の見直しと整理を行ったことで、一つ一つの学習活動について、障害の特徴にあった指導方法を考え、生徒にとってより分かりやすい授業を心がけ、指導工夫に努めることができた。
- B) 研修会や授業研究会を実施し、専門家チームからの指導・助言に基づき授業改善を図り、目標と課題点を明確にすることができた。

イ 課題

- A) 自閉症の特性に対応した指導内容を、系統性や関連性を考慮し教育課程に反映させる。
- B) アセスメントや授業実践を通し、生徒の変容を記録して蓄積していく。

3) 今後の展望

研究協力校との連携の下、対象生徒のアセスメントに基づいた個別の指導計画を作成し、指導内容・方法の工夫を行っていく。専門家チームの指導助言を仰ぎながら、自閉症指導の改善に努めていきたいと考える。

3. 宮城県立石巻支援学校

1) 研究の経過

ア 教育課程の編成に向けて

- A) 各学校の児童生徒の実態と学校の実情から、自閉症児への各学校の取り組みが示され、ワーキング部会で、具体的な指導の方法と研究の進め方に助言をい

ただいた。更に、研究運営協議会の委員からの助言により、研究の方向性が導き出された。

B) アセスメントから児童生徒の実態が明らかにされ、指導目標の設定や授業実践の課題が明らかになった。

a) 各学部の実態にあわせ、下記の検査を実施して、抽出児童生徒の行動の特徴や課題が明らかになった。

- ・ 教育課程の編成時、個々の特徴や課題、目標にあわせて授業を組み立てるように心掛けているが、抽出児童生徒の行動の特徴や課題が明らかになったことで、教育課程を見直してみると、授業については、各教科・領域の目標に合わせた内容で画一的であったり、一斉指導中心の授業展開となっていることが多い。

K I D S 乳幼児発達スケール [小学部、中学部、全児童生徒実施]

S - M 社会生活能力検査 [小学部、中学部、全児童生徒実施]

新版 T K 式田中ビネー知能検査 V [高等部一部生徒実施]

W I S C - III 知能検査 [高等部一部生徒実施]

P A R S (広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度)

[小学部、中学部、高等部、抽出児童生徒実施]

b) K I D S 乳幼児発達スケールを用いた小学部、中学部のアセスメントの結果より、以下のことが明らかになった。

○ 言語発達については、知的障害を伴う自閉症の児童生徒も知的障害の単一障害の児童生徒も発語のない子どもが多く、発達を促すような指導と同時に、言葉に代わるコミュニケーションの方法を身につけていくことが課題となっている。このような実態を踏まえるとこれまで自閉症児への対応として取り組まれてきた AAC (拡大・代替コミュニケーション) などの取り組みは、知的障害の単一障害児への取り組みとしても有効であると考えられる。

○ 社会性の発達については、自閉症、知的障害の単一障害ともに子ども同士社会性は、低い値を示し、同じように課題があると考えられることから、教育課程の中に子ども同士のかかわりを深めていくような指導内容を盛り込んでいく必要があると考えられる。大人に対しての社会性の発達では、自閉症の児童生徒では、総合発達年齢に比べ対成人社会性の値が低い児童生徒が多く、知的障害の単一障害の児童生徒は、自閉症の児童生徒と異なり、総合発達年齢に比べて対成人社会性の値が高い児童生徒の割合が多い。これらの事実と自閉症の特性から、社会性の発達において課題があり、現在の教育課程では、知的障害の単一障害の児童生徒については、発達を促すものとなっているが、知的障害を伴う自閉症の児童生徒に対しては、一人一人に配慮した指導を個別の指導計画の充実を図りながら、取り組んでいく必要がある。

c) 高等部は、アセスメントの抽出数が少なかったが、サンプリングから S - M

社会生活能力検査、新版TK式田中ビネー知能検査V、PARSの値を見ると、知的障害の単一障害に比べ、集団参加や意志交換の値が低く、自閉症の生徒同士の能力の幅が大きいことが分かった。そのため、個々に合わせた対応が求められるケースが多い。一方、将来の生活を見据えたとき、自立に必要な力は、社会性やコミュニケーションなどの自立活動の項目の「人間関係の形成」に関する内容にかかわる力であり、教育課程の指導内容でも多く取り上げられている。

以上のようなことから考えると、自閉症に対応した教育課程を知的障害に対応した教育課程と分けて編成するよりも、現行の教育課程における、各教科・領域で配慮すべき事項として取り組んでいる自立活動の内容や、指導内容を整理し、自立活動の個別の指導計画に基づいた授業づくりを充実させていくことにより、自閉症に対応した教育課程の編成に反映していけるものと考えられる。同時にこのような取り組みは、知的障害の単一障害の子どもたちの教育的ニーズに応じた授業づくりを行う上で有効であると考えられる。

- C) 現在の教育課程の指導内容を自立活動の項目ごとに整理した結果、以下のような傾向が分かった。
- a) 小学部、中学部、高等部ともに「人間関係の形成」の項目に関する指導内容が多く。項目(1)の他者との関わりの基礎に関することの指導内容を、小学部では生活単元学習や遊びの指導などを通して行っていることが多く、項目(4)の集団への参加に関することの指導内容は、中学部、高等部と学年が上がるにつれて生活単元学習や保健体育、特別活動、総合学習の時間の中で多く行っているという傾向がとらえられた。
 - b) 「コミュニケーション」の項目に関する指導内容が多く、項目(1)のコミュニケーションの基礎的能力に関する指導内容は小学部、中学部が多く取り上げており、コミュニケーションの項目(2)～(5)の指導内容に関しては、中学部、高等部の取り組みが段々増えてきている。小学部、中学部、高等部ともに生活単元学習などの合わせた指導の中や、国語の授業の中で取り組んでいることが多いという傾向がとらえられた。
 - c) 発達段階に合わせて、小学部、中学部、高等部の取り上げる指導内容が、個の部分から集団での部分に焦点をあてて指導していることが分かった。

自閉症の子どもたちに対応した指導内容の整理表

自立活動の項目	生活単元学習	体 育
◎人間関係の形成 (1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。	単元名：春を見つけよう 学習内容：買い物や調理、校舎周辺の散策を通して、友達とのかかわりを深める。	単元名：リズム運動 学習内容：相手の動きに協調して動くことができる。

イ 障害特性に応じた効果的な指導内容・方法の工夫

A) アセスメントから抽出児童生徒の実態が明らかにされ、自閉症の特性に対応した指導内容・指導方法及び支援の工夫を行い、授業改善等を行った。

a) スケジュールを視覚的に構造化し、見通しをもって活動できるようにしたこととで授業の流れを理解することで落ち着いて次の活動に取り組めるようになった。

○ 朝の会での1日のスケジュール、授業時間内のスケジュールを写真カードや絵カードを利用して視覚的にわかりやすく示したことで、見通しをもって取り組み、落ち着いて取り組めた。



～スケジュールの視覚支援～



～朝の会の様子～

b) 教科学習の小グループの中で、個別の課題や目標にあった学習活動を複数用意し、個別的に学習を展開した。また、子どもたちの興味・関心に基づく教材教具を工夫したり、学習理解を促す視覚支援を行うことにより、自主的に取り組めるようになった。また、教材・教具を媒介にして、子どもと教師との関わりも密になってきた。

○ 学習する子どもの実態にあわせた、マトリックス教材、パズル、写真カードと言葉のマッチングなどの認知教材を用意し、自分で準備、片づけを行い、次の課題に取り組めるような流れを作ることにより、主体性や持続性を高めるための指導を行った。



～小グループでの教科学習～



～教材を媒介にしての子どもとのかかわり～



～子ども実態に合わせた教材～



～子どもの実態に即した教材～

- c) 集団の中で、個に合わせた視覚的な支援や、モデリングを示すことで活動に取り組めるようになってきた。
 - 自閉症の児童生徒には、個々の実態にあわせフラッシュカードを用意したり、目の前でモデリングを示すことで集団の中で、みんなにあわせ活動することができた。
- d) 自閉症の特性に配慮した、施設・設備等の学習環境を整備する。
 - 教室内の掲示物の見直しを図り、視覚刺激を減らすことで落ち着いた取り組みができるようになってきた。廊下への掲示物の掲示の仕方に配慮し、不安感を持たせるような視覚刺激を排除した。

ウ 研修会、授業研究会の実施

- A) 3校それぞれの研修会、授業研究会に互いに参加することで、学校種における自閉症児の特性に配慮したかかわり方や授業づくりについての情報交換や協議を行い、自閉症児の発達段階や能力・特性等について幅広い見識を深められることができた。

a) 本校各学部授業研究会の実施

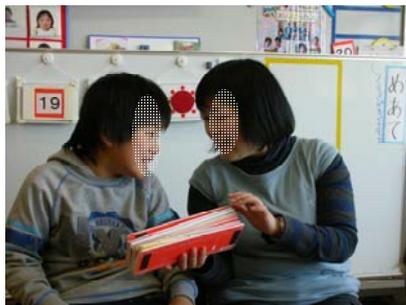
<小学部遊びの指導「リズムであそぼうⅡ」の授業研究>

- <本時のねらい>
- ・音楽や歌を聞いて、体の動かし方の違いを楽しむ。
 - ・やってみたい楽器を選び、その音を楽しむ。

<指導の手立て>

- ・メロディやリズムに合わせた動きの模範を教師や友達がやって見せることで、活動に見通しを持たせる。実際に活動するときは、必要に応じて「ジャンプ」「しゃがみます」など短い言葉で声掛けをする。タイミング良く体を動かした時は、「上手」「まる」など伝わりやすい言葉と笑顔で称賛する。
- ・動物の絵カードを提示し、手拍子で簡単なリズムをとりながら口型を見せ、鳴き声の模倣を促す。発音できたら短い言葉と笑顔で分かりやすく称賛する。
- ・「おおきなくり」「ちいさなくり」「やし」「さくら」の木の下で踊る4種類の絵カードを使用し、動きのイメージをつかみやすくする。また、教師や友達の動きに注目するよう指さしや声掛けをし、模倣するよう促す。
- ・先に友達が選ぶ様子を見せ、やり方に見通しを持たせる。数種類の楽器から自分がやりたいものを選び、その写真の下に自分の顔写真をはることで伝えるよう促す。
- ・名前を呼んだ後、目の前で教師が「は、い」の口型を見せることで「はい」の返事を促す。プログラムカードの中から特に頑張りが見られたもの

を2つ教師が選び、目の前に提示しどちらを頑張ったのか指さしやカードを手渡すことで伝えるよう促す。



～目の前で教師の口型を見せての指導～

< 中学部国語の指導「物の名前を覚えよう」の授業研究 >

< 本時のねらい >

- ・物の名前をみて平仮名を正確に並べることができる。
- ・自分の名前や物の名前を平仮名で丁寧に視写できる。

< 指導の手立て >

- ・平仮名カードを教師が一文字ずつ指差ししながら読むことで音声と文字が一致できるよう促す。
- ・間違っているときには、その文字を取ってもう一度よく見て選ぶよう促す。
- ・正確に並べられたときには、一文字ずつ一緒に確認しながら、音声文字を押して確認する。
- ・絵カードと文字カードが一致できるように文字を確認しながら、視写するように促す。
- ・丁寧に視写できるか見守り、できた時は称賛し、うまく書けなかった時は書き直すよう声掛けをする。
- ・絵カードと文字カードが一致できるかどうか、2枚の平仮名カードから正しい方を選ぶことで確認する。

< 高等部生活単元学習の指導「掃除名人になろう」の授業研究 >

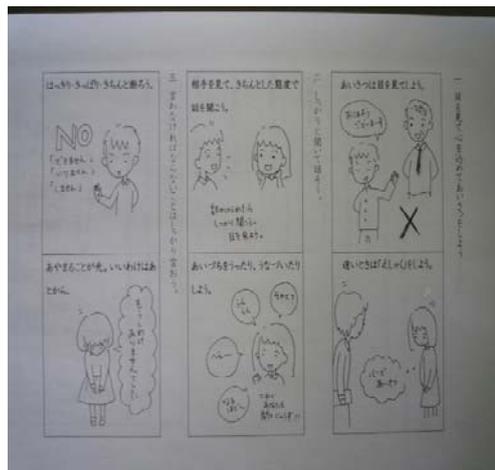
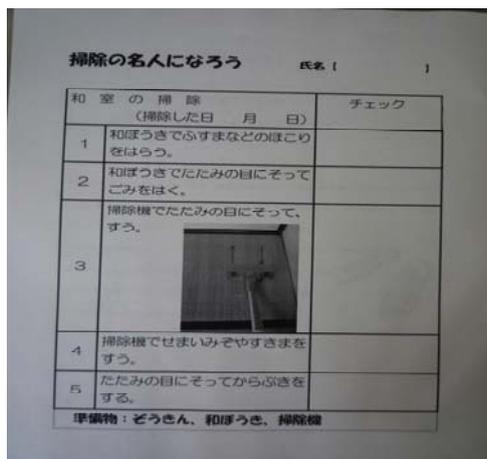
< 本時のねらい >

- ・順番を守って用具を用い、手順通りに窓掃除をすることができる。
- ・友達の清掃の様子を見て、手順と合っているかどうか確認できる。

< 指導の手立て >

- ・手順表を示し、二人組になって行うことで、自分の行った清掃が手順通りか、また汚れがきれいに落ちているかをチェックし合えるようにする。相互評価をすることで自分の活動を振り返りやすくする。

- ・スクイージーを使用する順番をグループで決めるように呼びかけ、友達と順番に使うことを意識させる。



～掃除名人になろうプリント教材～ ～あいさつを指導するためのコミックブック～

b) 大学の教授を講師に迎え「自立活動の取組－自閉症児を対象に－」

<講演の主な内容>

- ・自立活動の目標、改訂の背景、自立活動の内容、知的障害を対象とした自立活動について、講演をいただいた。

<講演会で指導を受けたこと>

- ・用語の表現に注意すること。
時間で特設・・・自立活動の時間における指導
関する指導・・・教育活動全体における指導
- ・教育課程と個別の指導計画の関連について
教育課程は学校全体の計画である。それに対して、個別の指導計画は個々の計画であり個別的なものである。それらが、ばらばらではだめである。現在の教育課程で、このような学級で、個々にはどのように指導していくべきかをリンクさせながら考えていくことが大切である。
- ・自立活動の内容の新設について
「人間関係の形成」という項目は今までも扱われてきたが、特に独立して項目を立ち上げたものである。
- ・自立活動の指導計画について
一つの項目だけを取り上げるのではないし、すべての項目を取り上げることもない。その子に必要な項目をいくつか取り上げ、他の項目と密接に関連させそして、各教科等とも関連させながら、自立活動の指導内容を考えていく。時間における指導を行っているので、教育活動全体で配慮しなくてもよいというわけではない。時間における指導と教育活動全体での指導が相互作用するように配慮しなければならない。
- ・その他
情緒障害学級では、合わせた指導ができないので、自立活動または、内容が該当する各教科等で指導することとなる。自立活動の時間における

指導は、児童生徒の実態に応じて設定することになるが、学級として動く場合に、なぜこの学級・学年に自立活動の時間における指導が必要なのかを明らかにしておけば、よいのでは。

2) 成果と課題

ア 成果

- A) 現在の指導内容を自立活動の項目ごとに整理した結果、小学部、中学部、高等部の発達段階にあわせ、指導内容が基礎的なことから応用的な内容になっていることがわかった。また、知的障害特別支援学校の教育課程として編成されていることから、自閉症の子どもたちの個別の目標や課題が教育課程に十分に反映されていない実態も明らかになった。
- B) 本校の KIDS 乳幼児発達スケールを用いた小学部、中学部のアセスメント結果や高等部の S-M 社会生活能力検査からみると、自閉症の特性の社会性の課題や対子ども同士のかわりが低いなどの共通の課題や目標から、知的障害を伴う自閉症の児童生徒と知的障害の単一障害の児童生徒を一緒に指導することが子どもたちにとって有効であり、自立活動の個別の指導計画の充実から教育課程に反映させていくことが大切であると考えた。

イ 課題

- A) 小学部、中学部、高等部の系統性、発展性を考慮し、個々の自立活動の目標や課題をどう教育課程に反映させるか検討し、自閉症の特性に対応した教育課程の作成が必要である。
- B) 自立活動の個別の指導計画に基づいた、P D C A サイクルでのアセスメントの実施と指導展開例等の蓄積から、教育課程にどのように自閉症の特性に対応した指導内容を関連づけていくかについて検証しながら、より個々の特性に応じた妥当性、発展性のある指導内容・方法を工夫していく必要がある。

3) 今後の展望

今後は、協力校の連携の下、自立活動の個別の指導計画に基づいた、P D C A サイクルでのアセスメント（実態把握）を多元的な方法で行い、指導展開例等の蓄積から、教育課程にどのように自閉症の特性に対応した指導内容を関連づけていくかについて検証し、専門家の助言を仰ぎながら改善を図って深め、より個々の特性に応じた妥当性、発展性のある指導内容・方法を工夫していく。

5 成果と課題

平成 21 年度は、本県北部の同一圏域における小、中学校、特別支援学校の連携の下、アセスメント（実態把握・指導目標設定・授業実践・評価・改善）を中心として、自閉症の特性に応じた教育課程の編成と指導内容・方法の工夫に関する研究を実施した。研究成果としては、アセスメントにより自閉症児童生徒の障害の特性や対人関係、コミュニケーション能力等の実態が浮き彫りとなり、個々の能力、特性に応じた指導目標の設定や授業実践を行う上での課題を明確化することができた。また、研究協議会において、この研究の目指すところは教育課程の編成であり、子供の変容だけを追い求めるもので

はないという意見がでた。そこで、現在の各学校の教育課程がどれだけ自閉症の特性に対応した指導内容となっているのか、各学校の各教科等における指導内容を自立活動の6区分26項目に分類、整理してみたところ「人間関係の形成」「コミュニケーション」に関する指導内容が多く含まれていることが明らかとなった。しかし、当初計画していた評価の方法は、取り組みが遅くなってしまったことと研究を進める上での方向性の検討に時間を要したことから、子どもの変容を見るための評価がしっかりできなかった。更には、教師保護者へのアンケート調査もできずに終わった。

そこで、平成22年度の4月当初より研究協力校3校で早くから連携をとり、取り組んでいくために、平成21年度の最後のワーキング部会で平成22年度の取り組みの具体案を話し合い、平成22年度のやることを確認済みである。

6 今後の展望

平成22年度は、アセスメント（実態把握）を多元的方法で行い、自立活動の個別の指導計画を作成し、自立活動の指導展開例を作成蓄積することにより、自立活動を中心として個別の指導計画に基づいた授業づくりを実践、検証し、自閉症の特性に応じた教育課程の編成と指導内容・方法の工夫についての研究実践を深めていきたい。また、研究成果を本県全域の各学校に広め、自閉症の特性に対応した指導の改善に努めていきたいと考える。

キーワード：実態把握，個別の指導計画，指導展開例，指導・支援の方法

① アセスメント（実態把握）

多元的方法，方法的複眼，適切なツールの活用でしっかり実施する。



② 自立活動の個別の指導計画

改善を図り，作成し，どの教科・領域の場面に関係するかを示す。

※自立活動の個別の指導計画の「目標」「内容」「方法」を設定し，どの場で指導するか，特設の自立か，関する指導かを考える。関する指導であれば，合わせた指導なのか，教科別の指導なのかを考える。



実際に実施、改善を図っていく。そのためにしっかりとした、個別の指導計画への記録をとり、PDCAサイクルを確立して教育課程に反映させる。

評価は、アセスメントで使った検査等や教職員、保護者アンケートをもとに変容を見る。また、個別の指導計画の評価等で授業での変容も見ると同時に、

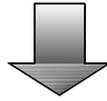
一人一人の課題や目標を教育課程に全部盛り込むのは難しい、そこで、自閉症の子どもたちの実態把握→個別の指導計画作成から自閉

症に対応するための教育課程に盛り込む内容を考え、盛り込む。

③ 自立活動の指導展開例を作る

④ 自閉症に対応した有効な指導、支援の方法

自閉症に対応した指導の仕方や支援の工夫を改善して深め、それをまとめる。(授業研究を行い、臨床心理士や指導主事より指導助言をもらい授業改善する)



⇒ 検証は、○アセスメントで使った検査等やチェックシートで変容を見る
○教職員、保護者アンケートをもとに変容を見る。
○個別の指導計画の評価で授業での変容も見る。

～平成22年度研究実施の構想図～